

I like employees who are self-starters.

自発的に仕事をする社員が好きですね。

I like 好きです、いいと思います

やまと言葉

I like...「～が好きだ」のように好みを言うことで、自分がそれに対して「賛同していること」、「プラスの評価をしている」ことを示す言い方がよくされます。第2章 実例 SAMPLE 3 (p.44 / CD1-13) にも同じような言い方が出てきましたね。

I like employees who are self-starters... 自発的に仕事をする従業員が好きです

パターン構文

「名詞(employees) + 修飾節」の文の作りですね。日本語だと、「自発的に仕事をする」従業員が好きです」のように修飾部分が名詞の前に来るところですが、英語は I like employees 「従業員が好きです」と漠然とした名詞でまず大きく置いておき、「どんな従業員なのか」という修飾部分(詳しい情報) は関係代名詞(who, which, that) などで後ろから足す言い方がとても自然です。

その一方で、このような英文の作りは日本語とは情報の順番が違うため、日本人である私達にとっては慣れておかないと聞き取りで混乱しやすいところです。I like employees 「従業員が好きなんです」と漠然とした名詞(employees) だけが来たら、まだ何も言ってくれていないようなものですから、ほぼ間違いなく後ろから修飾節で詳しく説明してくれる情報が足されてきます。聞き取りの時にはそれを覚悟して「うん、どんな従業員？」と待って、「名詞 + 修飾節で詳しい情報！」をひとまとまりの感覚で聞き取るようにします。

a self-starter 自分で始める人、自発的にやる人

慣用表現

必要に迫られたり、人に言われたりするのを待つのではなく、自発的にものごとに取り組む人

I'm quite capable of micro-managing people. And there're times here where I have to do that in order to get jobs done.

人を細かく管理するのは、やろうと思えば私は別に問題なくできますし、実際、仕事をこなすには、ここでも、まさにそれをやらなきゃならないときもあります。

capable やろうと思えばできる力がある

やまと言葉

「何かを実際に行う力、能力がある」が capable のコアの意味です。従って、「やろうと思えば、いつでもそれができる能力がある」、「やろうと思えば問題なくできる」のような意味になります。

to micro-manage people ミクロ(細かい) レベルで人を管理する

慣用表現

細かく、指示や確認をしながら人を管理することを意味します。

there're times here where ... ここでも ~ のときがある

パターン構文

times (とき、時期)の具体的な状態、様子を説明するのに where でつないでいます。「仕組み、詳しい様子」を説明する節をつなぐとき、先行詞の品詞に関係なく、よく where が使われます。

聞き取りの時には、[結論 詳しい情報 詳しい情報] (結 詳 詳) の順で情報が足されるという英文のつくりの特徴をヒントに、次のような感じで聞き進めると文頭から意味が入ってきやすくなります。

there are times here (ここでもこういうときがありますよ...ってどんなときかっていうと...)

...where I have to do that (そうしないといけないときがね)

...in order to (...でなんのためかという...) get jobs done (仕事をこなすためにね)

to get jobs done 仕事を終わらせる

やまと言葉

直訳的な意味は「仕事が終わった状態にする」ということから、「仕事を片付ける、終わらせる、仕事を(停滞させずに)進める、こなす」のような意味になります。

But it's important for me and I think it's good for the employee to learn how to be a self starter.

でも、この点は私には重要なことだし、従業員にとっても自発的に仕事をする力をつけるのはよいことだと思いますね。

it's important for me この点は私にとって重要です

文法 it は前に述べてきた「自発的に仕事をする」を指しています。

it's good for the employee to learn ... ~を学ぶことは従業員にとってよいことだ

パターン構文 it は「仮置き」の主語で、to 以下を指しています。「仮置き」の主語 it を使った [It's ~ for 人 to すること] の文のかたちはよくよく使われます。これが音だけで飛んできたときに、It's good for the employee to learn ... を「従業員にとって、...を学ぶのはよいことだ」と後ろから戻って理解しようとすると間に合いませんね。[結論 詳しい情報 詳しい情報] (結 詳 詳) の順で足されてくる「英文のつくりの特徴」を意識して、次のような意識で練習することで、[It's ~ for 人 to すること] の文のかたちに慣れてしまいましょう。

it is good (それっていいことなんですよ...って誰が何するの?)

for the employee (従業員が ... 何するのがいいことなの?)

to learn how to be a self-starter. (自発的な仕事の仕方を学ぶのがね)

to learn how to be a self-starter 自発的な仕事をする人になる

パターン表現 how to ...で「...の仕方」という名詞のかたまり(名詞句)にするこの言い方は、大変よく使われます。how to ... で「...の仕方」、「...のやり方」とひとかたまり感覚で処理できるようにしておく聞き取りが楽になります。

how to conduct an effective meeting 「上手な会議の運営方法」

how to spend your time 「時間の使い方、時間配分の仕方」

やまと言葉 さて、同じ「学ぶ」という動詞でも、to study が「机上で学ぶ、研究する」といった意味であるのに対し、to learn は「机上で学ぶ」場合と、「実践的に学ぶ」場合の両方に使える単語です。how to ... 「...の仕方、やり方」と組み合わさっている場合には to learn は「何かのやり方を実践的に学ぶ」という意味合いで使われている場合がほとんどで、to learn how to... 全体で「~ができる力を身につける、~ができるようになる」という感じになります。to learn how to be ... なら「~であるようになる、(努力や練習で) ~になる」といった感覚ですね。

to learn how to ride a bike (自転車に乗れるようになる)

to learn how to be a team-player (チームプレーヤーになる)

And the other thing is, insofar as you can, being sincere and trying to find a way to help the other side so that you're both happy is a good thing to do.

もうひとつのことは、できる限りにおいて、誠意を持って、双方が満足できるように、相手側を助ける手を捜すというのが、よいことだと思います。

The other thing is ... もうひとつの点は ...

ロジック 次の点に移るとき、話の転換点を示す「旗印」表現として、聞き取りでしっかりと押さえたい表現ですね。話のなかでは The first thing is..., Another thing is ...などの「旗印」とともに使われることがよくありますから、これらの「旗印」表現をヒントにして話の構造をしっかりと押さえながら聞く感覚を強化しましょう。

Insofar as の限りでは

慣用表現 「～の限りでは」という意味です。少し硬い表現ですが、イギリス英語でよく使われます。

sincere 誠意のある

やまと言葉 「誠意のある」という意味で、「言葉だけでなく、本心から思う」という感覚でも使われます。「言葉や行動と本心に食い違いがない」というのがコアの意味ですね。

...so that ~ そうすれば～になるから

ロジック **パターン構文** so that は「～するために」(目的)ですから、so that 以下に「確保・達成したい結果、望む結果」がきます。ですから、英語の話の感覚としては、文の前半で述べた「行動」の利点(得られる望ましい結果)を言って説得する「サポート」の役割を果たします。したがって、聞き取りの感覚としては so that ...が聞こえてきたら、「そうすれば～(が達成)できる!」、「そうすれば ☺!」と聞き取る感覚です。

to try to find a way toのための方法を探る

パターン表現 「方法を考える」、「手を捜す」のような意味でよく使われる表現です。a way の後ろに、ほとんどの場合、「to-」で「何のための方法、手なのか」という詳しい情報が足されてきますので、a way to - のセットで、この「結 詳」の情報の順序の感覚ごと身につけてしまいましょう。

happy 満足している

やまと言葉 so that you're both happy の happy を「双方が幸せになれるような」と理解すると、この話のコンテキストだとなんとなくしっくりきませんね。happy は、もっと広く、何かに対して「“うん、これはいい”と感じている状態」、「満足している状態」という意味で使われます。ここは「交渉の成功のさせ方」について話していますから、まさに「双方が満足できるような(交渉の進め方)」と理解するとすっきり理解できますね。ビジネスでは、このような感覚で happy が非常によく使われます。

We are very happy with the agreement. 私達はこの合意にはとても満足しています。

Mr. Smith is not very happy with how the project is going.

スミスさんはプロジェクトの進捗にご不満だそうだ

being sincere and trying to find a way ~ you're both happy

文法 being sincere ~ you're both happy のここまでで大きな名詞のかたまりで、長～い主語になっています。まず、to be sincere and to try to find the way という動詞(下線)をそれぞれ-ing のかたちにする事で「～すること」という名詞のかたち(動名詞)になっています。ここは、それに so that ~ 「～のために」という節がさらに足されて、長くなっています。これだけ主語が頭でっかちになってしまうと、聞き取りで迷子になってしまいやすいですが、次のように構文をしっかりと追って聞くことで、文の構造を見失うことなく、正確に聞き進むことができます。

being sincere and (誠意を持つこと...and で、もうひとつ来そうどうぞ...)

trying to find a way (方法を探ること...って何のための方法?)

...to help the other side (相手を助けるための...OK、で、それがどうしたの? 述語動詞はまだ?)

...so that (と思ったらまだ足されてきた...そうすると何が出来るの?)

...you're both happy (双方が満足できる...そういう方法ね、で、それがどうしたの?)

...is a good thing to do. (で、それはいいことなんです)

I mean, in some negotiations, it's ... you know, you can't win unless the other side loses,
とは言え、交渉ごとによっては、まあ、相手側が負けてくれないとこちらが勝てないというものもあります。

in some negotiations ... とは言うものの、交渉によっては ...ものもある

□ジック

I mean, in some negotiations... 以下は、自分の言いたい点(メインポイント)に対して、相手の頭に浮かびそうな「反論を先取り」して「まあ、たしかに、～もあります」と「おことわり」する内容が来る部分です。テキスト 第 5 章で紹介したような、「挿入」が入ってきたことを示す明確な「旗印」表現は来ていませんが、「挿入」が入ってきた可能性をつかむヒントになるのが、この in some negotiations の部分です。

some ...を使って、自分がメインポイントとして述べたことが「必ずしも当てはまらないケースや場合」などを挙げ、「たしかに～な場合もあるでしょう」、「たしかに～なものもあるでしょう」と相手の頭に浮かびそうな「メインポイントへの反論」を先取りして言うことがよくあります。

ただ、some...ときたときに、「おことわり」の挿入ではなく、単に some ... 「いくつかの～は」と具体例を挙げてくれることもあります。従って、some ... が聞こえてきたら、「おことわり」の「挿入」なのか、純粋な「サポート」なのか、その両方の可能性を頭に置いて内容をよく聞き進みます。さらに、後ろに but が来ないかに、よく注意します。but がくれば、「挿入」だったことが明確に分かりますね。このように、両方の可能性を頭に置いて聞けるだけでも、論旨を誤解するリスクが減ります。

in some cases,... but 場合によっては...なこともあるでしょう。とはいえ...

in some companies,... but ... 会社によっては...なこともあるでしょう。とはいえ...

...unless ~

□パターン構文

unless は「もし～でない限り」と「例外の条件」を示す言い方です。英語では、この部分が文頭ではなく、文の後半に付くことが多いです。残念ながら、聞き取りでは英文解釈のように後ろから戻って聞き取ることはできませんから、文頭から聞いていける方法を工夫しておく必要がありますね。

unless...の部分は「例外」条件を言ってくれているわけですから、unless...以下を「こういう場合は別だけだね」という情報だと理解するとよいかもかもしれません。例えば、前から聞いていって、unless...と来たところで、「どうだと別なの?」と聞きます。あるいは、この文のように ~ can't , unless ... の組み合わせの場合なら、より簡単に unless...部分を「どうだと「できる」の?」と聞いてもいいですね。

but in many negotiations, the real trick is to find something that benefits both sides. And I think you should be sincere in trying to do that and understand what their issue is.

でも、多くの交渉においては、本当のコツは、双方のプラスになることを探すことなんです。そして、そうすべく、相手の問題としている点を理解しようと、誠意をもって努力すべきだと思います。

the real trick is ... 本当のコツは...

□慣用表現

trick のコアの意味は「巧みな技や細工」です。the (real) trick is to...でよく使われる表現で、「～する(本当の)コツは ...」の感覚です。

to benefit プラスになる

□やまと言葉

[to benefit + (何か)] で 辞書には「～にとって恩恵がある」、「～にとって有益である」などの訳語が書いてありますが、要は「～にとってプラスになる」、「～にとってよい」というのがコアの意味です。名詞形 benefit も、コアは「プラスになること」、「役立つこと」という意味です。

something that benefits both sides 双方にプラスになること

□パターン表現

いつもの、「名詞(something) + 修飾節」の文のつくりですね。「～のような」という修飾節の情報

ず先に来る日本語の発想の順序と逆で、まず大きな概念(名詞)で漠然と置いておいて、詳しい情報を関係代名詞の修飾節で足す典型的な形ですね。ネイティブにとっては、「名詞(something) + 修飾節」でセットの感覚で、「双方にとってプラスになること」というひとつの大きなメッセージのまとまりの感覚です。このような、something(何か)、the things(物事)、people(人々)、the one(ある人)、someone(誰か)のような漠然とした名詞だけがポン！と来たら、ほぼ間違いなく後ろから詳しい情報が修飾節で足されてきますから、常にそのつもりで聞きます。Somethingと来たところで、「どんな？どんな？」と後ろから足されて来る情報を楽しみに待ち、「名詞+ 詳しい情報！」でひとまとまりで聞き取れるようにしておきましょう。

what their issue is 相手の問題としている点

パターン表現 what their issue is 全体で大きな名詞のかたまり(=名詞節)です。[what S+V]、[how S+V]といった名詞節は英語では非常によく使われ、ネイティブはそれ全体で一単語！の感覚なのです。ここは、直訳的には「彼らが問題としていることは何であるか」で、そこから「相手が問題としていること」という感覚になります。聞き取りのためには、[what S+V]で、「～なこと」、「～なもの」と一単語感覚で意味がサッとつかめるようにしておきましょう。

I think most Japanese people are able to disassociate the criticism to themselves, and are able to say, "Oh, this is directed towards this project" or "This is directed towards this engineering design," or ...

日本人の多くの方が批判と自分とを切り離して受け止めることができるようですね。それで、「ああ、これはこのプロジェクトについての話だ」とか「これは、この設計についての話だ」と思えるようですね。

most Japanese people 日本人の多く

慣用表現 「日本人は～だ」、「アメリカ人って～だ」のように「文化論」的な話や、何かの「傾向」について話すとき、英語では、言い切る言い方で「極論」や「絶対論」になってしまうことを避けて、「相対論」的な言い方になるように気をつけて話します。そのひとつが「多くの人が～」とか、「たいていの人が～」といった言い方で、こもそのような話し方になっています。少し高度な視点ですが、異文化コミュニケーションにおける配慮が感じられる点ですね。

Most people are ... たいていの人が ...

A lot of people are ... 多くの人が ...

More people tend to ... どちらかというとな人が多い

to disassociate ... ～を切り離して考える

やまと言葉 to associate に「否定(not)」を意味する接頭詞 dis- がついた単語です。to associate は「つながる、結びつける、関連づける」という意味ですから、to disassociate は「つながりをきる、切り離す、関係づけをなくす」のような意味になります。

are able to say, "....."

慣用表現 直訳的には実際に"....."のセリフを言うことになりますが、これは一種の慣用表現で、必ずしも実際にその発言をするということではなく、「そのように感じる、考える、そういう意識である」というのをセリフのかたちで表す表現です。

to direct towardsに向けられた

やまと言葉 direct towards... で「～の方向に向ける」という意味です。イメージとしては、direct towards ... と聞こえてきたら、towards ...以下の方向に向けて「(矢印)」が浮かんでくる感じです。ここは、主語が the criticism(批判や指摘)ですので、「(その批判は) ...に対してだ」、「(その批判は) ...についてだ」のような感じになります。

Because the big picture is to make it better. That's the focus. That's the goal.

というのも、全体像は「よりよくすること」にあるわけで、そこにフォーカスが当たっていて、それが目標だからなんですね。

the big picture 全体像

やまと言葉 「大きな絵」ということですが、ものを見たり、考えたりするときの「より大きな視野、大局観、全体像」を言います。「大局観を持って考える、広い視野で考える」と言いたいときは to think in a big picture のように言えます。

to make ... better よりよくする

パターン表現 この it は、ごく一般的な「状況」の意味でおかれています。to make it better で「(状況などを) よりよくする」の意味でよく使われる表現です。

That's ... で、それが

ロジック すぐ前に述べてきたことを that で受けて、「で、それって～なんです」という言い方はよくされます。特に、前に述べてきたことの「意味合い」や「重み」などを強調したいときによく使われるパターンでもあります。聞き取りのときには、このような that が聞こえてきたら that が (1) すぐ前に述べてきたことを指していることをしっかりと押さえる と同時に、(2) 「で、それこそが(まさに)～なんです」と「意味合

い」や「重み」を強調してくれているトーンもとらえられるようにしましょう。

The focus フォーカス、重要な点

やまと言葉 a focus はカメラやメガネなどのレンズの「焦点、ピント」も指し、そのコアの意味は「(焦点、関心、意識などが)集まる一点」です。そこから、重要性を置いたり、問題意識や関心を向けるべき「視点、フォーカス」のような意味で、非常によく使われます。

And yes, I'm sure that many Japanese people are disappointed when that criticism is directed to them as well.

そりゃ、もちろん、多くの日本人の方だっpegがっかりもするでしょう、自分に批判が向けられたらね。

Yes, I'm sure that ... そりゃもちろん ...

ロジック Yes は第5章(テキスト 93 ページ)にも解説しますが、「おことわり」の「挿入」に脱線するときによく使われる「旗印」表現です。「そうです。もちろん～という面もあります」と、聞き手の頭に浮かぶ可能性がある「反論-逆側の意見、側面」に対して理解を示しておいて、but で戻ります。また、I'm sure that ...は、直訳的には「私は that 以下のことに確信を持っています」という意味ですが、この表現も、「I know...」、「I realize...」と同じような感覚で、「そりゃ確かに...ってことは分かっています」という感覚で挿入側によく登場する「旗印」表現です。

But they have perhaps a better ability to work towards correcting the problem, versus taking it personally and becoming defensive.

でも、日本人の方が、どうも、問題を解決する方向で努力できるそうですね、感情的に受け止めて反発したりするよりも。

But ...

ロジック この but をしっかりと聞き取り、スピーカーが言いたい点(メインポイント)に戻ったことを押さえます。最初のメインポイント "I think most Japanese people are able to disassociate the criticism to themselves" がしっかりと聞き取れた人は、but...と聞こえてきたところで「よし、きっとまた同じようなことを言うてくれるはずだぞ...」と次に来そうな情報を先読みする感覚で聞けばいいですね。また、もし最初のメインポイントを聞き逃してしまった人は、この but の後ろで、恐らく同じようなことをもう一度言うてくれるはずですから、「もう一度チャンスをもらえたぞ!」という意識で but 以降を聞くといいですね。

perhaps どうも...、もしかすると

やまと言葉 perhaps は「恐らく」「もしかすると」という意味で、推測していることを示す単語です。ここは、日本人の特質、傾向について話している箇所なので、あくまでも、アメリカ人である自分が推測、観察した印象として、「言い切り」でない響きにしています。

to work towards ... ~に向けて努力する

やまと言葉 この work は「仕事をする」ことよりも、より広く「努力する」の意味です。towards... 以下に努力を注いでいる対象が来て、「...に向けて努力をする」の意味です。

..., versus ~ ~に対して ...

パターン構文 [(A), versus (B)] は、基本的には、「(A) 対 (B)」「(B) に対して (A)」と、(A)と(B) の2つのものを対比させる表現です。よく、スポーツの試合対戦を言うときに使われますね。この [(A), versus (B)] は、実は、この部分でのように、自分の言いたいことを正確に分かってもらうために、「対比している概念」をきちんと示して自分の言っていることの特徴をよりつかんでもらいたいときによく使われます。ここでは、日本人は「問題点を改善することにフォーカスできる」という自分の言いたいポイントに分かってもらうために、自分の頭にある「逆だ、対照的だ」と思っている概念を versus の後に示して、「(versus 以降)でなくってね」と対比して見せているわけです。聞き取りの時には、versus のところで、それ以降を「こうじゃなくってね!」「×(ペケ)!」という意識で聞き進めればよいですね。

to take it personally

慣用表現 何かを「個人攻撃として受け止める(感情的に受けとめる、傷つく)」という意味の決まった言い方です。

to be defensive

やまと言葉 辞書などには「防御的である」などのように解説してありますが、ここでは批判や指摘に対して「身を守る姿勢」、「ムキになって反発したり、弁明したりする姿勢」を指します。